

沖

5  
2019

俳句雑誌【おき】



蘭径



# 令

# 和

能村 研三

令和はじまる

新緑が日に日にあざやかに映る中、元号が令和となった。万葉集にある「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す」との序文から引用したものである。

令和には人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つという意味が込められているという。俳句を作るものにとってもこの元号はうれしい限りである。

そんな新しい御世を迎える中で「沖」は創刊五十周年準備が始まった。記念号、記念大会は来年の十月であるが、記念事業の凡そ概要が決まり本号に発表された。

今年の十月には、五十周年事業の幕開けの事業として私の句碑が石川県羽咋の氣多大社に建立される。

先師登四郎は全国に十五基の句碑が建立されているが、私自身の句碑は作らないこととしていた。今回は副主宰や同人会長からの強いお勧めをいただき建立を有難くお受けすることにした。

先日、三年前の勉強会でお世話になった鶴宿の道端ご夫妻のご案内

穴出でし蛇衣擦れの音連れて

倦怠と少し違ひし春愁

あたたかや心覚えの角曲がる

目借時多作多捨とか言はれても

雛の緋に少し倦みたり雛しまふ

先師似の耳打ち羅漢花いまだ

長閑なり天井絵見る折屈み

眩しみてごごみ歩きの梨花の棚

芽柳の己が重りに揺れてをり

若き枝令和の世へと接木して

で、建立場所と碑となる石を確認した。当日は千田百里同人会長、福島茂幹事長、塙誠一郎幹事が同行してくれた。

氣多大社は能登一宮の由緒ある神社で、先師登四郎が敬愛した折口信夫父子の歌碑が境内にある。

氣多のむら若葉くろずむ時に来て  
遠海原の音を聴きをり

折口信夫

春島に菜の葉荒びしほど過ぎて

おもかげに師をさびしまむとす

藤井春洋

また氣多大社の神宮寺の坊の一つである正覺院の境内には、平成十八年に建立された先師登四郎の句碑がある。

月明に我立つ他は箒草

今回の句碑は正覺院の登四郎の句碑と同じ石屋さんにお願いすることになっている。

句碑に刻まれる句は

暁闇の冷えを纏ひて神鶴翔つ

という句である。

# 鳥の恋

森岡 正作

## 拳握る

畳まれて菓子箱に入る紙雛  
一山の蠢くやうに春の雨  
ひと言に深手を負へり春北風  
五百羅漢に己を探しうららし  
武士の墓の丸石鳥の恋  
木の根開くジャズの流るる別荘地  
討ち死にのやうに亀浮く春の昼

毎年春になると「春愁」の句を二、三句作りたくなる。句がふつと湧いてくるわけではないので、少しは雰囲気作り、気分作りをしなければならぬ。そうすると、終いには周囲の人達も愛い顔に見えてくるが、目を凝らして見れば皆できばきと動いている。結局自分だけが呆然として怠けているのである。さて、「愛い顔」で「海鼠囁む」といきたいが、海鼠は冬の季語で句にならない、しばらくは苦吟が続くのである。

登四郎先生に「拳握るのみや男の春愁は」という句がある。老境の身にも「春愁」があるのだと思えば私の気分も和らぐものの、掲句の場合、拳に男の意地は感じられてもどこか弱々しい。そこに春の哀愁があるのである。研三主宰に「口惜しさにどこか通じるものを紛らわせるには拳を握るしかない」という良い鑑賞がある。きつこの句の先に、先生の望郷の念が生まれるのではなからうかと私は思うのである。

# 能村登四郎の軌跡〔9〕

能村 研三

## 夏日しんしん握り軋ますギリシヤの砂

『欧州紀行』昭42

教員視察団の一員として訪欧の旅に出た。この句など海外詠作品は句集には納めず、エッセイと共に『欧州紀行』という一冊の本にまとめた。「ギリシヤの砂」という一文には、最初の訪問地がギリシヤであったことと「ポセイドンの像」のギリシヤ彫刻やアクロポリスの神殿などを見た感動が綴られている。「夕焼の炎の中で、これらの建物を見る美しさ、今の私にとって最上以上のものだ、私は自分に与えられた今の時間が、この上もなく尊いものに思われた。私は砂の上に立つた体を思わず引き締めた。」昂ぶった文体で書かれている。

## 鳥雲に入るがごとくに吾子嫁ぐ

『定本野の沖』昭43

長女萌子が結婚した時の句。私の兄弟は間の兄二人が亡くなっているので姉と二人だけで、姉はやさしく親のように私の面倒を見てくれた。姉は国文学を専攻し父と同じ國學院大学に進み、そんなことから父とはよく話があった。この時の思いを「牡丹の芽」というエッセイに書き残している。「父親と娘はたしかにへ肉親の中の異性」であったから私は二人きりで家にいる時は妙に落ち着かなかった。娘の方もそんな意識があるのか妙によそよそしかった。」と述べている。父が娘を嫁にやる心情を感じた句でもある。

# だしぬけに樹上声ある晩夏かな

『定本枯野の沖』昭43

句集『枯野の沖』の中には、切字「かな」を用いた句は、六二八句の内この一句だけである。「や」を用いた句は「へ火を焚くや枯野の沖を誰か過ぐ」など四八句とあるものの切字を使うと古臭くなり現代俳句に新しさを求めるには切字を極力排除しようと考えた時期でもあった。登四郎が書いた「伝統の流れの端に立つて」という論では「今はともかく二十年三十年後の言語感覚の中で『けり』『かな』の感覚がそのまま生きつづけることは考えられない。」と述べるなど日本古来の韻律に対して疑問を投げかけている。

# 冬ぬくき大足も大き掌もあらず

定本枯野の沖』昭44

十一月二十一日石田波郷急逝と前書のある句。波郷は清瀬の療養所に入院をしていたが突然亡くなった。この三か月前の八月に登四郎は波郷を訪ねた。この時に波郷からはこの辺で結社誌を持つように強く進言されたという。この時の波郷は病人に似合わない迫力のある語気だったという。年齢は登四郎より若かったものの「馬酔木」の先輩として処女句集『咀嚼音』の跋文を書き、登四郎が俳壇の新人としてデビューを後押ししてくれた人で、終生畏敬の念を抱いていた。波郷への追慕の思いが「大足」「大き掌」に表されている。



# 蒼茫集



鍵の癖 甲州千草

たぶのき 大畑善昭

\*蛇穴を出づそれぞれ鍵の癖  
白黒をつけぬ幸あり入彼岸  
咲き初めてしだれ桜の梵字めく  
あたたかや雨滴の残る滑り台  
春宵や小江戸漬けなる酢に噎せて  
点灯ののちの暗さや白牡丹

\*たぶのきにたましひゝ・二忌  
春荒れの荒るるにまかす木も人も  
僧の足袋夜明けもぐつと早くなり  
雪被る紅梅木魚鳴つてをり  
いぬふぐり空に微塵の暇もなく  
まんさくや少年に刻疾く流れ

トロフィー 望月晴美

店蔵 辻美奈子

千葉県俳句作家協会准賞

トロフィーの虹いろびかり春燈  
賜りし花束おもしろあたたかし  
春の日のうらうらうらと蔵の街  
春の蚊の寄り添うてくる五百羅漢  
彼岸詣とほのきし過去寄りてくる  
\*卒業生多数決にて海へ行く

店蔵に屋号を掲げ花を待つ  
\*呉服屋の階段背より降りて春  
蔵窓の黒てらてらとうららけし  
啓蟄の湯気たのもしき炊飯器  
スイートピーしあはせさうといふあはれ  
春はあけぼの空気清浄機が吃る

半音階

千田百里

山笑ふ水も咲ふよわたくしも  
早々と戸の開き啓蟄の花屋  
三月十日東京の空明る過ぎ  
\* 春愁は半音階に似たるもの  
音のなく刻む砂漏や啄木忌  
花はまだかと差しつ差されつ羅漢さま

宇宙

宮坂恒子

トルソーの叫び余寒の空へかな  
青空の芯となりたる揚ひばり  
春蟬のしみ入る湖の蒼さかな  
\* みな宇宙目差す容につくしんば  
売り声にのせられさうな苗木市  
少年の走る意気込み桜坂

先頭

荒井千佐代

\* 鶴帰る先頭のみが鏡持ち  
耶蘇村の石積集落鳥雲に  
破船朽ちゐる菜の花に囲まれて  
忌日のみ逢へる人あり花ミモザ  
鳥も蝶も来れ聖堂開け放つ  
紫荊礫像いまも血を流し

神棚と

宮内とし子

\* 鳥帰る船に海図と神棚と  
潮騒に負けじ二人の卒業歌  
啓蟄や銀座にあまた小画廊  
藍がめに藍の泡うく花ぐもり  
飴細工伸ばせば蛸にうらけし  
寝姿の羅漢に春日逃げやすし

# 潮鳴集



船筆筒

小林陽子

肩甲骨まはせば翼風二月  
包丁研ぐ風の眩しき二月かな  
風光る鳥のかたちの蒙古斑  
\* 江戸遠くして春陰の船筆筒  
川端信司  
涅槃西風笑ひ羅漢の顎にひび

蔵町

大石誠

菜の花に溺れさうなるディーゼルカー  
電線の見えぬ蔵町つばめ来る  
耳よりな話と羅漢蝶の昼  
\* 外出の羅漢もあらむ春の闇  
春のひる振子時計の音とゐて

水仙花

五十嵐章子

\* 水仙花泣きたい夜は筆を持ち  
不忍池のさざ波きらら春隣  
寒見舞おほかた知らぬ夫の友  
モンスターおそふや北風の音はげし  
三坪の朝のパン屋に春来る

測量士

埴誠一郎

\* 春塵の彼方をのぞく測量士  
選り分ける古き名刺や余寒なほ  
つまづきて土竜の塚と知る遅日  
床上のコード絡まり春の風邪  
大寺の入母屋造り揚雲雀

# 飛鷹選評



能村 研三

月光にさざなみ起ちて机摺り くだうひろこ

机とはえぶりと読み、田植前の田の土をえぶりでならず作業を言う。作者のくだうさんは青森の方で、今回は八戸に伝わる伝統行事のえんぶりをテーマに詠んだ。きらめく烏帽子をまとい、凍てつく大地を摺る太夫の舞には、豊作を願い春を待つ、人々の願いが込められている。田をならず農具「えぶり」は「いぶり」（ゆすぶり）に由来すると言われ、冬の間眠っている田の神をゆさぶり起こし、田に魂を込める儀式である。えんぶりの日、降っていた雪も止み月の光が差し込む中雪上をえんぶりの舞は佳境に入った。「さざなみ起ちて」の表現が美しい。

春キャベツ切れば迷路の出口見ゆ 仲里 貞義

キャベツは歳時記では夏に入るが、春キャベツは水気をたっぷり含んでいて、いちばんおいしい時季である。キャベツの断面が迷路だという句は他にも見たような気がするが、迷路に彷徨いこんでしまうより、出口が見えてきたことは希望があり明るい句となった。春キャベツの季語も効いている。

春愁や生れては消ゆる雲に似て 黒岩武三郎  
春愁という季語は春のそはかとな哀愁のことだが、春を惜しみながらほんやりと空を仰ぐと、光が降り注ぐというより雲の動きが活発で、彼方かに雲が現れては消えていった。空を見つめていた時間的な経過もうかがえる。

料峭や楽器を運ぶ外階段 永尾 春己

私もかつて文化事業に携わっていたころ、これに似た経験をしたことがある。私の場合は運んだのは楽器ではなく美術展示用のケースであったが、春まだ寒い中、裏方として客に見えないように準備をするのは大変なことだ。

耕のはじめのはじめ芥焼く 佐川三枝子

種まきや苗を植えたりするため田畑を鋤き返す。最近は耕運機やトラクターを使って行うこともあるが、小さな畑などでは人の手によって鋤を振る姿が見える。日頃から手入れは怠らないものの、畑の芥を焼き清浄な気持ちで畑を打ち始めることにした。

春疾風返す波さへ毛羽立ちぬ 木村あさ子

海面を叩くように吹き付ける春疾風に大きく波が穂を上げた。静かに戻っていくはずの波であるが、吹き付ける風に毛羽立っているようにも見えた。北国の荒々しく肅条たる風景が思い浮かぶ。

# 沖作品



# 能村研三選

\* 月光にさざなみ起ちて机摺り

青森

くどうひろこ

声張るは父に似し顔子えんぶり  
重ね舞ふえぶり烏帽子火の粉降る  
一献に熱き門付けえぶり衆  
笛太鼓のつりて涅槃雪舞へり  
東雲の移ろふ色や春立ちぬ

埼玉

仲里 貞義

\* 春キャベツ切れば迷路の出口見ゆ  
菜の花や妻の手際の辛子和  
断捨離の買物ひとつヒヤシンス  
せせらぎの戻り促す花菜雨  
陶酔は眠し臍の指揮者の背  
奔放に生きて野梅の香にちから  
菜飯出て戦後に話及びけり  
百体に百の来歴寄贈雛  
\* 春愁や生れては消ゆる雲に似て

黒岩武三郎

鳥声の響き合ふ朝梅三分

福岡

永尾 春己

料峭や楽器を運ぶ外階段  
木の芽風トランペットの音合せ  
玻璃越しの海光りたる雛の間  
伏す窓に春の鳥の大き影  
風光るビルの足場の安全旗  
春めくや夜の蹲の水の音  
\* 耕のはじめのはじめ芥焼く  
嫁ぐ娘の荷を纏めぬる木の芽雨  
\* 春疾風返す波さへ毛羽立ちぬ  
うすうすと一揆の墓標黄水仙  
干割れたる五百羅漢に雪解風  
岩木嶺の風が風呼ぶ野焼かな  
砂浜に拾ふごま石春の雪

福岡

佐川三枝子

青森

木村あさ子